

和歌山大学教育学部
2020 年度 共同研究事業

和歌山大学を中心とした「ESD for SDGs コンソーシアム」の推進

研究代表：教育学部 岡崎 裕
和歌山大学教育学部附属中学校 山口康平
田辺市立上秋津小学校 松本桂

2020 年度の和歌山大学教育学部共同研究事業の一つとして、「和歌山大学を中心とした ESD for SDGs コンソーシアム推進」プロジェクトを実施した。本事業は和歌山大学教育学部と同附属中学をはじめとした附属学校、及び和歌山県と和歌山県周辺域に所在する地域の学校による連携のもと、『21 世紀の社会を生きるうえで必要となる資質・能力』（21 世紀型能力）の育成を目指し、SDGs 推進を目指す共同研究のための枠組み「和歌山 ESD for SDGs コンソーシアム」を組織し、ここを起点として共同研究の成果を地域全体としてすることを通して教育の質的向上を図るものである。

和歌山大学は第 3 期中期目標において「附属学校 3 校が連携し、『多様な特性のある児童・生徒が共に学びながら』（インクルーシブ教育）、『21 世紀の社会を生きるうえで必要となる資質・能力』（21 世紀型能力）を高めるための教育について学部・大学院との共同研究を行う。その成果を、和歌山圏域における地域特性を活かした『持続可能な社会の担い手育成』（ESD）のための先進的教育モデルとして、地域の学校に提供する。」としている。ESD(Education for Sustainable Development)は、「持続可能な開発のための教育」、もしくは「持続発展教育」等と訳され、2005 年から 2014 年までの DESD (Decade of ESD=「持続可能な開発のための教育のための 10 年」)以降、学校教育の現場を含め広く実践されている。一方 SDGs は、MDGs(Millennium Development Goals)の改訂版として 2015 年の国連 SDGs サミットにおいて合意されたもので、合意文書である”Transforming our world: the 2030 Agenda for Sustainable Development”において示された 17 の国際目標である。ESD と SDGs は従って「手段」と「目的」の関係にあり、和歌山大学ならびに同附属中学校においては、明確かつ具体的な目的意識(SDGs)に向けた教育活動(ESD)を進めることとした。ここにおいて和歌山大学では、これを教育学部連携事業による地域との共同研究事業のひとつとして位置付け、広く和歌山県域において参加校を募りながら「和歌山 ESD for SDGs コンソーシアム」を組織し、研究を深めることとした。なお、2020 年度においてはコンソーシアム構築に向け、和歌山大学教育学部との共同研究のもとで進めている、和歌山大学附属中学校、並びに田辺市立上秋津小学校における SDGs 教育活動を中心に報告する。

今回報告する 2 校の他にも、和歌山信愛女子高等学校をはじめとして複数の学校と既に計画を進めているが、残念ながら今年度の特殊な状況の中で、取りまとめには至らなかった。本研究については次年度以降も継続し、より精緻な研究を進めたい。

＜田辺市立上秋津小学校の実践＞

「SDGs 達成を意識した総合的な学習の時間～主体的にヒト・モノ・コトとつながる児童の育成～」

上秋津小学校では今年度、松本桂教諭による実践研究が進められた。当該研究は松本教諭が和歌山大学大学院教育学研究科教職開発専攻（教職大学院）の学生として行なった教育実践に基づく研究であり、構造上、和歌山大学と上秋津小学校との共同による研究活動とすることができる。

研究報告の抄によれば、「本研究は、E S D教育及びS D G s の視点を取り入れた教育課程の見直し、S D G s 達成を意識した総合的な学習の時間の授業改善を学校全体で行った研究」であり、さらに「S D G s 達成を総合的な学習の時間の大きな目標に掲げることで、児童は、自分が考え行動しなければ問題を解決できないことに気づき、解決へ向け動くことによって自分の学習と生活が地域、世界への貢献へとつながることを体感できた。また、教師にとってもS D G s を学習に取り入れることにより、教科横断的な学びの重要性に気づき、授業改善へとつながった」とされ、学校全体としての取り組み、児童の学びに向かう主体性の重視、地域（Local）と世界(Global)に向かう視野、そして教師にとっての気づきなど、複数の視点のなかで研究活動は進められている。なお、この研究は次年度以降も継続する予定である。

「社会に開かれた教育課程」の実現を目指すために



SDG s との関連

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	なかよし
一学期	げんきにそだてわたしのはな あそびばにでかけよう	大きくそだてわたしの野菜 とび出せ！町のたんけんたい	花いっぱい学校にしよう 花いっぱいの上秋津に	ごみ減量大作戦 米作り	みかんから考える上秋津	梅から広がる世界	夏野菜を作ろう 夏に咲く花を植えよう
二学期	(夢ひがし公園)			障害を持つ人に聞こう	上秋津の防災を考える	上秋津を語ろう(歴史)	冬野菜を作ろう
三学期		町のすてきをつたえたい					春に咲く花を植えよう
上秋津学習発表会							

＜和歌山大学教育学部附属中学校の実践＞

実践報告 総合「和歌山×SDGs」2nd stage～課題解決に向けたアクションプランを考える～

山口康平

はじめに

初年度の「和歌山×SDGs」1st stage では、和歌山において持続可能な社会の実現に向けてどのような取り組みが行われているのかを調査し、『インタビューリサーチ報告書』に成果をまとめた。また、1年間の探究の総括として実施した調査結果報告交流会で討議した結果、生徒たちは次の4点を和歌山で解決すべき課題として結論づけた。

- ①環境→人が住みやすく、生態系も安定
- ②資源のつかいすぎ（廃棄物を減らす）→地球温暖化を止める
- ③少子高齢化（とくに若者の人口流出）→未来の担い手を増やし、福祉を充実
- ④働き方の改革→自殺の減少、仕事に楽しみ

2年目の2nd stage では、これらの課題の解決をめざして、アクションプランをつくるための調査・研究に取り組んでいる。新型コロナウイルスによる休校で取り組みのスタートが夏休み後に遅れ、標準履修時間よりもやや縮小しての実施となっているが、本稿執筆中の1月末現在、3月中旬に予定している研究成果発表会に向けて、2次調査を実施する準備を進めている。途中経過ではあるが、本年度実施してきた2nd stage の取り組みを報告する。



「インタビューリサーチ報告書」リンク



「調査結果報告交流会ダイジェスト版動画」リンク

1. 事前学習 カードゲーム「SDGs de 地方創生」（2020年8月21～25日／各クラス2時間）

「SDGs de 地方創生」は、地方創生に取り組む日本の自治体や、ソーシャルセクターの具体的なアクションを題材にし、多様なプロジェクトの実行を通じて“行政と市民による協働”を体感できるカードゲームである。ゲームでの体験を通して、まちづくりがうまくいっているケースとそうでないケースの間にある違いは何かを考えたり、アクションする上でのハードルや生じる課題は何かを理解することをねらって開発されている。「和歌山×SDGs」3rd stage では、今年考えたアクションプランに基づいてプロジェクトを実施することを予定しているので、これから自分たちがやろうとすることをイメージするための事前学習として取り入れた。多目的ホールで充分に空間をとり、事前事後の手指消毒をさせて実施した。

＜生徒の感想＞

- ◆町づくりの取り組みは、1つが欠けることによって行えなくなるということがわかった。なのでいろんな業者が助け合って町を盛んに、豊かにしていくことが大切だと思った。
- ◆私たちのグループは達成できなかったけど「こういうやり取りをして、みんな繋がっていくんだな」って思いました。

◆なんというか、みんながケチケチして、敵視していた感じがして、ひとつの町をより良くするために取り組んでいるのに、自分の企業の損得を考えすぎて、自分たちの町がより良くあるための地域的な協力ができていなかったのかなって思いました。最後に、行政にお金がたくさん余ったのは何よりの証拠ですね。もっと行政がしっかりして、全体像が見えて、それを有効活用することができれば、もっと町が発展していたのかなって思いました。地域の中のつながりって大事ですね。

2. 2nd stage ガイダンス&プロジェクトチームの結成(2020年9月24日/2時間)

体育館に学年全体で集まり、1st stage でまとめた和歌山の課題について振り返り、2nd stage での学びの見通しを説明した。次に、第2学年を担当する教員が大幅に入れ替わったため、新しく加入した教員にも SDGs について考えてもらい、それぞれが SDGs に関連して気になっていることを座談会で紹介した。その議論を聞いた生徒から質問を受けながら、2nd stage で扱うテーマをどうするか学年全体で討議し、次の4つのカテゴリーに分類した。



- ①海の問題
- ②ゴミ・資源問題
- ②まちづくり・和歌山活性化
- ④いまある社会問題

生徒たちは興味関心別に①～④のグループに分かれ、その中でさらに同じ課題を解決したいという思いを持った仲間を集め、3～6名のプロジェクトチームを結成した。結果として34のプロジェクトチームで2nd stage の取り組みをスタートすることになった。



3. 第1次調査活動(11月12日、19日、26日/計6時間プラスα)

アクションプランづくりに向けての情報収集を行い、調査・研究するために2時間×3回の活動時間を確保した。電話やメール、Z o o mを使って取材したチームもあれば、アポイントメントの電話を入れて訪問取材を行ったチームや和歌山の海へゴミの現状を調べにフィールドワークに出かけたチームもあった。これまでの本校の総合的な学習の時間において、校外へ調査に出かける活動は年に1回、全班(全生徒)同じ日に6時間扱いで設定していたが、早めに弁当を食べて昼休み中に出発可とし、放課後の時間帯も上手く使って3日間設定することで、多面的・多角的に情報収集できる良さがあつた。



②水質調査の方法を知るため

和歌山県環境衛生研究センターへ



③制服リユースSHOP

KAKAYAでの取り組みを取材

① ぶらくり丁商店街協同組合へ取材のアポイントメントの電話

本年度の取り組みについて、テレビ和歌山の取材を受けた。12月20日に放映された特集番組「SDGs 未来都市和歌山市から持続可能な地域を創る（前編）」の22分45秒～26分15秒で紹介されている。



特集番組 YouTube のリンク

4. 研究中間発表会(12月21日/2時間)

「海の問題」「ゴミ・資源問題」「まちづくり・和歌山活性化」「いまある社会問題の解決」の4つの分科会毎に、第1次調査活動の成果と課題、および第2次調査活動に向けての方向性を発表・交流した。日頃は5つの教室に分かれ、その教室担当の教員にゼミナール形式で指導を受けて調査活動を進めているが、発表後に他の教員や同じ分野で別のテーマに取り組んでいる生徒からの質疑を受け、それぞれの活動計画を見直すヒントを得る機会とした。

発表例①

アクションプラン

3rd stage で「家庭排水をできるだけきれいにしてから流すための意識啓発とその方法を伝えるプロジェクト」を実施する。

テーマ

海や川の水質環境

メンバー ●石田 明渡 石橋 小山 西村

問題 和歌山の川・海は日本の環境基準に満たしていない

アイデア

- ・実験などをして目に見えてわかるようにする
- ・店に油や洗剤の節約を呼びかけるポスターを貼る
- ・油を濾すためのものを安く変えるようにする

影響 油や洗剤が他の生物にどのような影響を与えているかを知ってもらい自分たちがどのように変えていかないとけないかを考えてもらう。

2次調査に向けての構想

- ① 紀ノ川の水質汚染について調査・研究している和歌山大学の先生に汚染の要因と対策案について質問する。
- ② 和歌山市下水道局に、下水処理の実際と和歌山市の下水に関する水質の現状と変化について取材する。
- ③ 和歌山市で求められている家庭排水をきれいにする対策とその方法を明らかにする。

テーマ 海や浜の水質環境を改善する

第一次調査の目的
和歌山の水質汚濁の現状とその対策を知る

調査内容
和歌山県環境衛生センター水質環境グループへ訪問
主に聞いたこと

- ・水質汚濁の現状→判断の基準
- ・一般家庭にできること
- ・基礎知識

第一次調査で分かったこと

○成果

- ・工場排水よりも家庭排水の方が海を汚していることがわかった
- ・河川水質評価は底生生物で決めている

▼課題

- ・家庭から出る水には制限がない
→油や汚れた水をそのまま流さない
- ・家庭排水についての知識がない
→みんなの排水マナーの意識が低い

発表例②

テーマ

~プラスチック製買い物袋の
廃止への道のり~

メンバー ●前田 出嶋 小竹

問題

課題（何のために？）

- ・環境に良いレジ袋だけど20%くらいの人が購入していること
- ・マイバッグ意識が低い
- ・有料化になった理由を知らない人が多いこと

アイデア

何をする？ 誰と協力する？ どこに提案する？

新しいデザインのマイバッグ(他の企業とコラボ)
→アンケートもする

影響

どこに？誰に？どのような影響を与えたい？ どう変えたい？

世界的に環境問題が減って欲しい
日本人にレジ袋有料化の理由を知って欲しい

アクションプラン

3rd stage で「みんなが使いたくなるようなエコバッグ」を開発する。

→販売までできる！？

2次調査に向けての構想

- ①エコバッグの試作品を作る。
- ②カバン屋さんに試作品を見てもらい、アドバイスをもらう。

テーマ プラスチック製買い物袋廃止への道のり

第一次調査の目的

レジ袋が有料化になってレジ袋を買う人は減ったのか。
マイバッグを持ってくる人は増えたのか。

調査内容

ミナトペカリー(11月12日) プリアンドレ(11月12日)
マツゲン(11月19日) オークワ(11月26日)

第一次調査で分かったこと

○成果

レジ袋の有料化が始まる前と営業は変わりはない。
レジ袋の収益を社会問題や募金などに使うことになっている。
レジ袋のコストは高くなった。(どのくらいかは企業秘密)
マイバッグを持ってくる人は増えた。
マイバッグを使わずに購入している人は20%くらいいる。
マイバッグにすることで環境保全に取り組んでいるという意識が高まる。

▼課題

マイバッグを洗わない

→プラスチック製買い物袋の袋なら気軽に捨てられるし、常に新しい。
20%の人はマイバッグを使っていない。

おわりに

昨年度より「和歌山×SDGs」のカリキュラム開発に着手し、SDGs を柱に3年間通して探究を続けるようにしたこと、生徒がそれぞれの興味関心に応じて課題設定し、仲間と協働してプロジェクトを実現するための調査・研究を行うようにしたこと、本校の総合的な学習の時間においても、探究のサイクルが確実に回るようになってきた。コロナ禍の厳しい状況ではあるが、SDGs を通じて社会の様々な方々とつながることが増え、質実ともに豊かな学びになっていることを感じている。

探究的な学習における生徒の学習の姿

(総合的な学習の時間 学習指導要領より)

